

MINGEI: The Beauty of Everyday Things

令和7年 4/22^{tue.} - 6/29^{sun.}

MINGEI
美は暮らしの
なかにある
民藝
プレスリリース

千葉県立美術館
Chiba Prefectural Museum of Art

〔上から〕 緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸(鳥取) 1931年頃／流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28年頃／
藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935年頃／食器棚 イギリス 19世紀
いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa

展覧会概要

展覧会名 民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある
MINGEI: The Beauty of Everyday Things

会期 令和7(2025)年4月22日(火)–6月29日(日)

会場 千葉県立美術館 千葉市中央区中央港1-10-1

開場時間 9時～16時30分(入場は16時まで)

休館日 月曜日(ただし5月5日は開館)、5月7日(水)

料金 一般:500円(400円)、高校・大学生:250円(200円)

- ()内は20名以上の団体料金、中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と介護者1名は無料
- アンケートに答えた高校・大学生等は無料

主催 千葉県立美術館

特別協力 日本民藝館

協力 静岡市立芹沢銈介美術館、カトーレック

企画協力 朝日新聞社、東映

後援 朝日新聞千葉総局、NHK千葉放送局、産経新聞社千葉総局、
株式会社ジェイコム千葉、千葉テレビ放送株式会社、株式会社千葉日報社、
東京新聞千葉支局、日本経済新聞社千葉支局、株式会社バイエフエム、
毎日新聞社千葉支局、読売新聞千葉支局

監修 森谷美保(美術史家)

監修協力 濱田琢司(関西学院大学文学部 教授)

企画趣旨

約100年前に思想家・柳宗悦が説いた民衆的工藝、「民藝」。日々の生活のなかにある美を慈しみ、素材や作り手に思いを寄せる、この「民藝」のコンセプトはいま改めて必要とされ、私たちの暮らしに身近なものとなりつつあります。本展では、民藝について「衣・食・住」をテーマにひも解き、暮らしで用いられてきた美しい民藝の品々約150件を展示します。また、いまに続く民藝の産地を訪ね、そこで働く作り手と、受け継がれている手仕事も紹介します。

さらには、2022年夏までセレクトショップBEAMSのディレクターとして長く活躍し、現在の民藝ブームに大きな役割を果たしてきたテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションも見どころのひとつとなるでしょう。

柳が説いた生活のなかの美、民藝とは何か——そのひろがりや今、そしてこれからを展望する展覧会です。



Photo: Yuki Ogawa

結び文座布団 芹沢銈介 静岡
1930年頃 個人蔵

みどころ

1 細やかな手仕事が生み出した刺し子の着物や、素朴な味わいにあふれる器など民藝の名品、約150件が集結

国内のみならず世界各地に目を向け、名も無き作り手たちが生み出す日用品にこそ「美」が宿る、と見出した柳宗悦の眼。本展では、柳らが集めた暮らしのなかにある美しい民藝の品々を中心に紹介し、「民藝ってなんだろう?」という初心者の方々にも親しみやすくご覧いただきます。文様の美しさだけでなく機能性も兼ね備えた江戸時代の刺し子の着物や、大胆な模様が印象的なアイヌの衣装、愛らしいイギリスのスリッパウェアの皿、フォルムの美しい芯切鋏や手箸といった、日本民藝館(東京・駒場)や静岡市立芹沢銈介美術館などの所蔵する、時代や地域も様々な名品が並びます。

2 民藝の「いま、そしてこれから」に迫る展覧会

柳の亡きあとも、民藝運動はひろがりを見せました。また、日本の各地でも伝統を受け継ぎ、現在でも新たな職人や手仕事の品が誕生しています。本展では、現在の民藝の作り手に注目し、小鹿田焼(大分)、丹波布(兵庫)、鳥越竹細工(岩手)、八尾和紙(富山)、倉敷ガラス(岡山)の5つの産地を紹介。現代作の展示とともに、現地を取材して制作した本展オリジナルの映像により、そこで働く人々の想いや制作風景を伝えます。

また、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Artディレクター)によるインテリアの実例を、現代の生活に溶け込む「これからの民藝スタイル」としてインスタレーション展示します。

つくる人、つなぐ人、つかう人のコミュニケーションで続いていく、これからの民藝にも視点をひろげます。

3 展覧会特設ショップもお楽しみに

本展覧会の特設ショップでは、第III章で紹介する東京・高円寺のショップMOGI Folk Artが日本各地の作り手たちと交流して生み出した別注品の数々や、注目の染色家／アーティスト・宮入圭太氏が本展のためにデザインしたグッズ、そして各地のやきものやガラス、布、和紙、木工など、国内外の職人による民藝の品々を多数取り揃えます。

暮らしのなかに取り入れたい、民藝ならではの自然の素材や、人の手のぬくもりに、特設ショップでも出会うことができます。どうぞご期待ください。

柳宗悦と民藝運動

「民藝運動の父」と呼ばれる思想家・柳宗悦(1889-1961)。東京、麻布生まれ。1910年、雑誌『白樺』の創刊に参加。宗教哲学や西洋美術などに深い関心を持ち、1913年に東京帝国大学哲学科を卒業。その後、朝鮮陶磁、木喰仏の調査研究、収集を進めるなか、無名の職人が作る民衆の日用雑器の美に関心を抱いた。1925年には、その価値を人々に紹介しようと「民藝」という新語を作り、濱田庄司や河井寛次郎ら共鳴する仲間たちと民藝運動を創始する。1936年、日本民藝館を開設し、初代館長に就任。以後ここを拠点に、国内外各地への調査収集の旅、文筆活動や展覧会活動と、活発な運動を展開した。

[左から]
角酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1979年／
酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1985年頃／
栓付瓶 メキシコ 20世紀中頃
いずれも日本民藝館蔵



Photo: Yuki Ogawa

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから



日本民藝館「生活展」会場写真 1941年

第Ⅰ章

1941生活展——柳宗悦によるライフスタイル提案

1941(昭和16)年、柳宗悦は自身が設立した日本民藝館(東京・目黒)で「生活展」を展開。民藝の品々で室内を装飾し、いまでいうテーブルコーディネートを表示しました。暮らしのなかで民藝を活かす手法を提示した、モデルルームのような展示は当時珍しく、画期的でした。

第Ⅰ章では「生活展」の再現を試み、実際に出品された作品を中心に、柳が説いた暮らしの美を紹介します。



藍鉄絵紅茶器

濱田庄司 栃木 1935年頃 日本民藝館蔵

笹の葉の文様が描かれた濱田庄司の紅茶器セットは、柳宗悦が自宅で愛用したもの。ティーポットは日本の土瓶の形状を採用しており、日本家屋の室内で用いるのに相応しい姿を見せる。

チャイルズ・スクロールバック・アームチェア

イギリス 19世紀 日本民藝館蔵

1929年に柳宗悦と濱田庄司がイギリスから持ち帰ったウィンザーチェアのひとつ。テーブルと椅子を使う暮らしの伝統がない日本において、柳が優れた椅子として使用したのは、イギリスの椅子が中心であった。



第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝——美しいデザイン

柳宗悦は、陶磁、染織、木工などあらゆる工芸品のほか、絵画や家具調度など多岐にわたる品々を、日本のみならず朝鮮半島の各所、中国や欧米などへ旅し、収集を重ねました。時代も古くは縄文時代から、柳らが民藝運動を活発化させた昭和にいたるまでと幅広く、とりわけ同時代の、国内各地で作られた手仕事の日常品に着目し、それらを積極的に紹介しました。

第Ⅱ章では民藝の品々を「衣・食・住」に分類し、それぞれに民藝美を見出した柳の視点をひも解きます。

刺子稽古着(部分) 江戸時代 18-19世紀 日本民藝館蔵



Photo: Yuki Ogawa

MIN GEI

衣

Ⅱ——①「衣」を装う

“只被る為なら美しさ等どうでもいい。だが美しさは着たい気持ちをそそる。”

——柳宗悦『用と美』1941年



屋号入革羽織

江戸時代 19世紀

静岡市立芹沢銈介美術館蔵

火消しや大工などが着用したものと言われる。背には井桁に「加」の字。裾に回した模様は漢字と思われるが、日本ならではの粋な感覚がある。

(上から)

流描指輪 (2点)

河井寛次郎(細工:増田三男)
京都 1930-40年代

赤漆彫卍文帯留(右)

黒田辰秋 京都 1930年頃

銀象嵌赤漆花字帯留(左)

青田七良 京都 1930年頃

色絵五弁花模様帯留

富本憲吉(細工:増田三男)
東京 1931年

染付更紗模様帯留

富本憲吉(細工:増田三男)
東京 1931年

個人蔵



Photo: Yuki Ogawa

最初期の民藝運動に大きな影響を与えた高林兵衛の旧蔵品で、夫人や娘たちが愛用したものだという。

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

厚司(アットウシ)

アイヌ(北海道) 19世紀
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

アットウシは、オヒョウ、ハルニレなどの樹木の皮をはぎ、その繊維で織り出した樹皮布。模様は一見してアイヌと分かる強い個性を放っている。



剣酢漿草大紋 山道文様被衣

江戸時代 18-19世紀
日本民藝館蔵

被衣とは身分の高い女性たちが姿を隠すために頭の上から被って着る外出着のこと。本作は麻に可憐な草花を刺繍した古い衣類を、染め直して被衣に仕立てた再生衣料。



MIN GEI 食

Ⅱ——②「食」を彩る

“人間は美味を好む。だが料理だけに止めるのではない。
それを綺麗に皿に盛る。その皿さへも選擇する。”

——柳宗悦「用と美」1941年

網袋(鶏卵入れ)

朝鮮半島 20世紀初頭
日本民藝館蔵

藁編みの籠の中心に開いた窓から卵を入れるという、朝鮮の鶏卵入れ。上部の紐で吊るして、保管できるように作られている。



スリッウェア角皿

イギリス 18世紀後半-19世紀後半
日本民藝館蔵

現代でも人気が高いイギリスのスリッウェアも、民藝同人らが日本に広めたやきもののひとつ。本作は柳田蔵のスリッウェアの優品で、数多く作られたパイ皿。

塗分盆

江戸時代 18世紀
日本民藝館蔵

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

住

Photo: Yuki Ogawa



桐文行燈 江戸時代後期 個人蔵

Ⅱ——③「住」を飾る

“暮らしは色々なものを招く。それに応じて適宜な材料が選ばれ、適当な形が整えられる。”

——柳宗悦「用と美」1941年

MINJEI

(左上から時計回りに)

手箒

仙台郡山(宮城) 1939年頃

鹿沼箒

下野鹿沼(栃木) 1939年頃

手箒

信州(長野) 1939年頃

いずれも日本民藝館蔵



芯切鋏

京都 1920年代後半-1930年代前半
日本民藝館蔵

昭和戦前期の京都で作られていた、和蠟燭の芯を切るための仏具用鋏。切り取った芯が落ちないような造りや、握りやすさを考慮した柄など、機能性もよく考えられている。



色絵猪文タイル

オランダ 16-17世紀 日本民藝館蔵

円座

朝鮮半島 1930年代

日本民藝館蔵

柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司の3人は、1936年、1937年と2年連続で朝鮮を旅し、当時朝鮮で作られていた日用品を購入した。これは模様として文字が編み込まれた座布団代わりの敷物・円座。



椅子

オーストリア 19世紀初頭
静岡市立芹沢銈介美術館蔵



第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

T O P I C

気候風土が育んだ暮らし——沖縄

本土から遠く離れた沖縄は、古い歴史を持ち、独自の文化、風習を育んできました。第Ⅱ章最後では、柳が「奇跡」と称えた沖縄の民藝に焦点をあて、紅型、織物、陶器、漆器などにより、かつての沖縄の豊かな暮らしを顧みます。



芭蕉布縞着物

沖縄 19-20世紀前半

静岡市立芹沢銈介美術館蔵



クバ団扇

沖縄 1950-60年代 日本民藝館蔵

流水に桜河骨文紅型着物

沖縄 19-20世紀前半

静岡市立芹沢銈介美術館蔵

紅型は、南国らしい色鮮やかな沖縄の様式染である。模様が多くは、日本本土からの影響が強いが、季節感がなく、四季の模様が自由に取り込まれているところに特徴がある。芹沢銈介は、沖縄の紅型に出会って夢中になり、染色家としての道を歩み始めた。



第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから



双魚文上着裂(モラ)(部分) サンブラス島(パナマ)
20世紀後半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵

第Ⅲ章

ひろがる民藝——これまでとこれから

柳宗悦の没後も民藝運動は広がりを見せました。濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介が1972(昭和47)年に刊行した書籍『世界の民芸』では、欧州各国、南米、アフリカなど世界各国の品々を紹介。各地の気候風土、生活に育まれたプリミティブなデザインは民藝の新たな扉を開きました。

一方、民藝運動により注目を集めた日本各地の工芸の産地でも、伝統を受け継いだ新たな製品、新しい世代の職人たちが誕生しています。本展では国内5つの産地から、これまでと現在作られている民藝の品々や、そこで働く人々の“いま”を紹介します。

そして、本章最後では、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)の愛蔵品や、世界各地で見つけたフォークアートが“いま”の暮らしに融合した「これからの民藝スタイル」を、インスタレーション展示で提案します。

Ⅲ——① 『世界の民芸』——新たな民藝の世界

[左から] 濱田庄司、芹沢銈介、
外村吉之介『世界の民芸』
朝日新聞社 1972年 個人蔵／
靴下 アゼルバイジャン地方
(イラン) 20世紀後半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵／
人形 フニン県ワンカヨ(ペルー)
20世紀後半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵



Photo: Yuki Ogawa



第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる「民藝」

——これまでとこれから

Ⅲ——②民藝の産地 一作り手といま

昭和戦後期以降の日本のものづくりは機械での生産が主流となりますが、伝統を失わずに手仕事を続ける産地、失われた手わざの復活を試みる職人、新たな民藝を創作する人々が登場します。本展では5つの産地に焦点を当て、かつての品物と現代の製品、そこで働く人々のいまを紹介します。

小鹿田焼

おんたやき
大分県

江戸時代中期から続くやきものの里。川の水流の力で地元の土を搗き、地形を活かした登り窯で焼く。一子相伝の窯に伝わる、日常使いの器たち。



Photo: Yuki Ogawa

丹波布

たんばぬの
兵庫県

手紡ぎの糸を草木で染め、絹のつまみ糸を織り込む手織の布。江戸末期にはじまり一度は廃れるも戦後復興し、現代の作り手へと引き継がれる。



Photo: Yuki Ogawa

鳥越竹細工

とりこえたけざいく
岩手県

数多い産地のなかでも柳が好んだ、寒冷の地の細くしなやかな原料でつくる繊細な竹細工。一方で、現在は素材調達の危機という局面をむかえている。



Photo: Yuki Ogawa

八尾和紙

やつおわし
富山県

もとは薬売りの包み紙として発展した八尾和紙。現在、八尾で唯一和紙作りを続ける桂樹舎は、芹沢銈介の影響による色鮮やかな型染和紙に今も新しい試みを重ねる。



Photo: Yuki Ogawa

倉敷ガラス

くらしきからす
岡山県

ガラス職人の小谷眞三が、民藝運動の関係者らの勧めではじめた日常使いのぬくもり溢れるガラス器。現在は二代目の工房に引き継がれる。



Photo: Yuki Ogawa

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

T O P I C

Mixed MINGEI Style by MOGI

第Ⅲ章最後では、現在の民藝ブームを牽引する存在として活躍するテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションを展開します。



テリー・エリス／北村恵子
(MOGI Folk Art ディレクター)自邸



Photo: Yuki Ogawa

MOGI Folk Art

モギフォークアート

東京・高円寺でMOGI Folk Artを主宰するテリー・エリスと北村恵子は、セレクトショップBEAMSのバイヤーとして活躍していた1990年代から、民藝運動とも関わりの深い日本の手工芸品を、服飾や北欧インテリアと組み合わせて紹介してきました。2003年にBEAMS内のレーベル「fennica」を立ち上げ、2022年には自身のショップMOGI Folk Artを新たにオープン。現在に至るまで「デザインとクラフトの橋渡し」をテーマに、国内の産地を回って見出したトラディショナルな民藝・工芸の品々を現代の暮らしに取り入れることでもたらされる豊かさを提案しています。作り手との交流を通じて、伝統的な技法やモチーフを活かしたオリジナルの別注品も数多く生み出しています。



MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子

Photo: Yuki Ogawa

MIN
GEI

イベント

① 講演会「暮らしのなかの民藝」

日時 5月11日(日) 14:00～15:30
講師 森谷美保 (本展監修／美術史家)
会場 千葉県立美術館 講堂
定員 180名 (事前申込制)
参加費 無料

② トークイベント「MOGI Folk Artディレクターに聞く、豊かな暮らしの作り方」

日時 5月24日(土) 14:00～15:30
登壇者 テリー・エリス／北村恵子 (MOGI Folk Art ディレクター)
会場 千葉県立美術館 講堂
定員 180名 (事前申込制)
参加費 無料

※詳細は決まり次第当館ホームページでお知らせします。

展覧会公式サイト

<https://mingei-kurashi.exhibit.jp/>

展覧会公式SNS



交通案内

- 電車・モノレール：JR京葉線または千葉都市モノレール「千葉みなと」駅下車徒歩約10分
- 自動車：東京方面から 東関東自動車道「湾岸習志野」I.C.
成田方面から 京葉道路「穴川」I.C.
東金方面から 千葉東金道路「千葉東」I.C.
館山方面から 京葉道路「松ヶ丘」I.C.からそれぞれ約20分
※駐車場無料(78台うち2台障害者用)



会場・お問合せ

千葉県立美術館

Chiba Prefectural Museum of Art

〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1 TEL 043-242-8311 <https://www.chiba-muse.or.jp/ART>





左上から時計回りに：
 [左から] 角酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1979 年／酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1985 年頃／栓付瓶
 メキシコ 20 世紀中頃 いずれも日本民藝館蔵、八尾和紙(富山)、[上から] 竹行李 陸中鳥越(岩手)
 1930 年代／刺子足袋 羽前庄内(山形) 1940 年頃 いずれも日本民藝館蔵、鳥越竹細工(岩手)
 Photo: Yuki Ogawa

【広報用画像】 下記の画像を広報用に提供します。

<使用条件>

- ・画像のご請求は、event-art@mz.pref.chiba.lg.jp（普及課・広報担当）まで、メールにてお送りください。
- ・画像をご使用の際は、記事・番組内容について情報確認のため、グラ刷り・原稿の段階で校正をevent-art@mz.pref.chiba.lg.jp（普及課・広報担当）まで、メールにてお送りください。
- ・作品部分のトリミング、文字載せなどはしないようにお願いいたします。
- ・広報用画像使用の際は、各画像下のクレジットを必ずご掲載ください（No.1を除く）。
- ・画像の使用は本展を紹介する場合に限らせていただきます。展覧会終了後の放送・掲載はお断りします。また本展会期中であっても、再放送や転載をされる場合はご連絡ください。

			
No.1 千葉会場キービジュアル ※本画像に限り、クレジット表記は不要です。	No.2 （上から）緑黒袖掛分皿 因幡牛ノ戸（鳥取） 1931 年頃／流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28 年頃／藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935 年頃／食器棚 イギリス 19 世紀 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa	No.3 スリップウェア鶏文鉢 イギリス 18 世紀後半 日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa	No.4 （左から）角酒瓶 小谷眞三 倉敷（岡山）1979 年／酒瓶 小谷眞三 倉敷（岡山）1985 年頃／栓付瓶 メキシコ 20 世紀中頃 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa
			
No.5 （上から）竹行李 陸中鳥越（岩手）1930 年代／刺子足袋 羽前庄内（山形）1940 年頃 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa	No.6 日本民藝館「生活展」会場写真 1941 年 日本民藝館蔵	No.7 藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935 年頃 日本民藝館蔵	No.8 （上から）流描指輪（2 点）河井寛次郎（細工：増田三男）京都 1930-40 年代／赤漆彫文帯留（右）黒田辰秋 京都 1930 年頃／銀象嵌赤漆花字帯留（左）青田七良 京都 1930 年頃／色絵五弁花模様帯留 富本憲吉（細工：増田三男）東京 1931 年／染付更紗模様帯留 富本憲吉（細工：増田三男）東京 1931 年 いずれも個人蔵 Photo: Yuki Ogawa
			
No.9 厚司（アットウシ）アイヌ（北海道）19 世紀 静岡市立芹沢銈介美術館蔵	No.10 刺子襦古着 江戸時代 18-19 世紀 日本民藝館蔵	No.11 流水に桜河骨文紅型着物 沖縄 19-20 世紀前半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵	No.12 スリップウェア角皿 イギリス 18 世紀後半-19 世紀後半 日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa
			
No.13 網袋（鶏卵入れ）朝鮮半島 20 世紀初頭 日本民藝館蔵	No.14 （手前）塗分盆 江戸時代 18 世紀／（盆上左から）染付羊歯文湯呑、染付蝙蝠文湯呑、染付雨降文猪口 肥前有田（佐賀）江戸時代 18-19 世紀 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa	No.15 芯切鉢 京都 1920 年代後半-1930 年代前半 日本民藝館蔵	No.16 双魚文上着裂（モラ）サン Blas 島（パナマ）20 世紀後半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵
			
No.17 小鹿田焼（大分、現代作：坂本工窯、坂本浩二窯） Photo: Yuki Ogawa	No.18 八尾和紙（富山、製作風景：桂樹舎） Photo: Yuki Ogawa	No.19 MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子 Photo: Yuki Ogawa	No.20 MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子自邸 Photo: Yuki Ogawa

千葉と民藝が交差する特別展示！

千葉会場限定コーナー

「民藝運動前夜－我孫子時代の柳宗悦 朝鮮美術と白樺派」

開催概要

会期：令和7(2025)年4月22日(火)－6月29日(日)

時間：9時－16時30分

会場：千葉県立美術館 第3展示室「民藝 MINGEI ー美は暮らしのなかにある」内

柳宗悦は20代後半～30代はじめまで、千葉県我孫子市で過ごしました。民藝運動が本格化する直前にあたるこの時期に、朝鮮の民藝品の収集と、雑誌『白樺』に、柳は注力していました。日本民藝館から特別にお借りした作品や、千葉県立美術館のコレクションを通して、千葉と民藝の関わりをご紹介します。



1.



2.



3.



4.

1. 染付辰砂鯉形水滴 19世紀 日本民藝館蔵 2. 陶俑加彩牛 唐時代7世紀 日本民藝館蔵
3. 岸田劉生《霽れたる冬之日》1917(大正7)年キャンバス・油彩 千葉県立美術館蔵
4. 椿貞雄《牡丹》1920(大正9)年キャンバス・油彩 千葉県立美術館蔵